

《温故知新プロジェクト》

福島県原子力発電事故により避難している子どもとその家族への介入
—福島県内の幼稚園に通う子どもの保護者へのインタビューから—

谷岸悦子* 齋藤正子* 立石和子* 齋藤麻子* 岩田みどり*

The Intervention In Lives of Children and Their Families
Who Are Evacuating Because of the Fukushima Nuclear Accident
—From the Interviews with the Parental Guardians of
Children Attending a Kindergarten in Fukushima—

Etsuko TANIGISHI, Masako SAITO, Kazuko TATEISHI, Asako SAITO, and Midori IWATA

1. はじめに

本研究の始まりは、平成24年度から当学の生活科学研究所のプロジェクトにより実施されている研究『東日本大震災をいかに乗り越えるか—福島県における子どもの実態と保育の研究I』である。この研究は、増田まゆみ教授、大澤力教授(2014)が中心となり「人との関わりを広げる保育への取り組み」を行い成果が挙げられている。研究結果より、子どもたちは被災の影響に対して、多様な人との関わりを通じた子どもの育ち・保育の重要性を見出している。しかし、「戸外での活動が制限されている、自然とふれあい身体を十分に動かすことが難しい¹⁾」という面接の結果が得られ、保育実践の意義・効果は示唆されているが、健康状態の実態や不安については明らかにされていない。

東日本大震災は、今年で震災後5年目に入るが、2014年10月の時点における福島県内の子どもの避難者数(18歳未満)は12,437人である(ふくしま連携復興センター)。厚生労働省から現在も外遊びの制限や福島県産の摂取や出荷等を差し控えるよう要請している食品がある。また、福島県の子どもの肥満傾向が震災後には、全国平均より4.3~9.4%に跳ね上がっている²⁾ことから、生活環境が健康に影響を与えていることがうかがえる。

大原ら(2011)は、「災害が発生すると、実態把握を目的として多数の組織が異なる被災地調査を行い、調査の重複が被災地に過度の負担を強いることも多い。」³⁾と述べる。支援のあり方も発災からの時期や支援方法を検討し被災者の負担や自立を妨げないことが必要である。

そこで今回の本プロジェクトは、研究フィールドである幼稚園に通う子どもとその家族の生活・健康状況を踏まえたうえで、幼稚園で働く職員および子どもたちとその家族

への健康支援活動をアクションリサーチの方法を用いて検討するものである。

2. 目的

東日本大震災後に福島県県内で生活をしている子どもとその家族に対する生活・健康に対する意識調査を実施し、得られた結果から健康支援活動を行い、災害中長期の健康支援活動の検討を目的とする。

3. 用語の定義

健康支援活動：本研究では、震災の影響による身体の健康やこころのケアを含めた健康増進・疾病の予防を行う活動とする。

災害中長期：本研究では、災害サイクル Phase-3；発災3週間から数か月または数年経過した時期であり、被災地の復興が本格的に始まる慢性期(復興期を含む)とする。中長期は、被災者が自立した生活を営めるように、安全・安楽で快適な生活・地域社会の建て直しの支援が必要な時期である⁴⁾。

アクションリサーチ：①研究者が現場に入り、「その現場の人たちも研究に参加する活動」である。②学問(社会科学)的な成果だけでなく「社会そのものに影響を与えて変化をもたらす」ことを目指す研究活動である⁵⁾。

4. 文献検討

佐野(2013)⁶⁾は、震災3~8か月の急性期の被災地で乳幼児の行動変化を調査している。その結果、震災後に子どもの反応には、「不安」「発達の後退」が目立ち、それに対し子どもの気持ちをそのまま受け止め回復を待つという対応がとられていた。また、福島第一原子力発電所の事故による環境汚染(論文では、今回のことを環境汚染の一つと捉えている)によって「これまで通りの保育」が難しくな

* 東京家政大学(Tokyo Kasei University)

り、保育方法の変更は子どもの運動能力の低下などの発達に影響を及ぼしていることも明らかとなっていた。そして、「最後に子どもたちを支援する保育者に対しても専門家による支援やケアが必要とある。」と述べられている。

中村(2014)⁷は、東日本大震災後の福島県郡山において、2012年度と2013年度に児童の体格・体力・運動能力、運動習慣・生活状況を大規模調査して比較している(2012年度 17,975名、2013年度 17,620名)。その結果、①男女ともに平均値を上回り、肥満傾向児の出現率も高い。②体力が全国平均を下回っていた。また、この調査チームの介入により運動時間・体力の改善が見られたことも述べられている。この研究チームにおいても、「保護者・幼稚園教諭・保育士・小学校教諭・スポーツ指導者を対象としたミニレクチャーと、屋外・屋内において実施可能な運動遊びの実践をしようとした講習会を実施している。」ということで、子どものためには、その支援者への援助が必要であることを述べている。

これらの文献より、本プロジェクトチームで可能な支援は、保護者を中心とした、子どもを支援する方々、すなわち保護者、保育士・幼稚園教諭などに対して、医療的知識を駆使した専門家としての健康支援である。

5. 研究方法

1) 対象

福島県いわき市の子どもたち(園児)の保護者及び幼稚園の職員。

2) 手順と方法

幼稚園の現状調査と園児の保護者及び幼稚園の職員の思いの調査とアクションリサーチ。

(1) 現地調査

子ども学部子ども支援学科 大澤力教授より紹介を受け、看護者として医療面よりの援助が可能か幼稚園へ訪問した。

(2) 参与観察

運動会(平成27年10月)へ教員3名参加した。目的は、①幼稚園の特性と園児の健康状態を観察、②幼稚園の特性を知る、③救護活動、④顔の見える関係性作りの実施である。

(3) 面接調査

グループ面接調査を行った(平成27年11月)。対象者は3名一組とし1回の面接は40～60分で、2組に実施した。

面接内容は、(i) 保護者：①震災から現在の子どもの生活や健康状況、②健康状況での心配なこと、③子どもの家族の様子、④生活環境の変化と工夫していることである。(ii) 幼稚園の職員には、保護者の①～④と⑤現在、もっとも苦労していることを自由に語っていただいた。

【データ分析の方法】内容分析。手順は、面接内容の録音の承諾を得て、その後逐語録を作成し、文脈ごとに分析し、カテゴリー化した。カテゴリー化したものを研究メンバー間で討議し内容の妥当性を検討した。

(4) アクションリサーチ

健康支援活動の試みは、幼稚園における『てあらいのがっこう』開催である。今回は、インフルエンザが流行する時期であったために、基本的な感染予防行動に注目した。インフルエンザの基本的予防行動としての「咳エチケット」、「マスクの装着の方法」、「手洗い」について指導した。幼稚園の職員の協力を頂き、研究メンバーである教員3名、看護学生6名で『てあらいのがっこう』を実施した。対象は園児約60名であり、内容は手洗いの必要性を紙芝居と寸劇で伝え、手洗いを実施し、洗い残しの確認をした。手洗いの洗い残しの確認はグリッターバグ¹を用いて行った。

(5) 倫理的配慮

東京家政大学倫理審員会の承認を得てから実施した(2015承認)。

6. 結果

1) 参与観察の結果

ここでわかったことは、園児の健康状態は良好であり、順調に発達していた。この幼稚園の教育方針「心身ともにたくましく、元気に遊ぶ。よく考えのびのびと行動できる子どもたちに」の基に、自分たちで考え、積極的に運動会に参加していた。

2) 面接の結果

(1) 研究協力施設および研究参加者の概要

研究協力施設は、福島県いわき市にあるA幼稚園である。面接の研究参加者は、A幼稚園に現在通園する園児の保護者4名、A幼稚園の職員2名である。年齢は30歳代から40歳代であり、すべて女性だった。

¹ グリッターバグ：手に専用蛍光ローションを塗り、手洗いをした後にブラックライトを当てるとローションの洗い残した部分が白く光り、それにより手の洗い方を評価できる教材である。

表1 幼稚園に通園する子どもの保護者および幼稚園の職員の気がかり

カテゴリー	サブカテゴリー
放射線による生活環境への影響	放射線の影響不安 震災直後は子ども達だけ避難した 避難生活をプラスに考えた 半分のこどもが甲状腺検査にひっかかった 放射線を計測しながらの外遊び 一年くらいしたら吹っ切れた 内部被爆を気にする 近海の海水浴はなんとなく手を引く
からだの成長がこころの成長にリンクする	震災時2歳から3歳の児の成長に影響しているかもしれない 震災時2歳から3歳の児は良く食べる。肥満の児がいる 下の子には（外遊びの）経験させられなかった
危険察知力不足	砂遊びやぐちゃぐちゃ遊びができなかった ブランコでも、外で遊んでいればよかった 五感で感じられないと大きかったのかな？ ハイハイは芝生でさせない
幼稚園で培われたたくましさ	幼稚園の配慮に気持ちが落ち着く 遊びすぎるくらい遊んでありがたい こどもの体力がつく、どこでも生きられる
適切な情報提供	先生の知り合いが講演にきてくれた 先生からきちんとした情報を私たち（保護者）へ発信あり
温度差がある	家族間での意見の違いに悩む 被災地でも被害に差がある 忘れていたわけではないが騒いでいるのは地元だけ

(2) 面接の分析の結果

面接の分析を「幼稚園に通園する子どもの保護者および幼稚園の職員の気がかり」に注目してまとめた。その結果は表1に示す通りである。得られたデータは、23のサブカテゴリーからなり、6つのカテゴリーに分類された。6つのカテゴリーは、【放射線による生活環境への影響】、【からだの成長がこころの成長にリンクする】、【危険察知力不足】、【幼稚園で培われたたくましさ】、【適切な情報提供】、【温度差がある】である。これらのカテゴリーに沿って、研究参加者の語りをもとに特徴ある内容について説明していく。尚、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉、面接での語りであるデータはMSゴシック体で表記している。

(i) 放射線による生活環境への影響

【放射線による生活環境への影響】は、〈放射線の影響不安〉、〈震災直後は子ども達だけ避難した〉、〈避難生活をプラスに考えた〉、〈半分のこどもが甲状腺検査にひっかかった〉、〈放射線を計測しながらの外遊び〉、〈一年くらいしたら吹っ切れた〉、〈内部被爆を気にする〉、〈近海の海水浴はなんとなく手を引く〉の8つのサブカテゴリーから構成されていた。以下に〈放射線の影響不安〉に関する語りを示す。

放射能で子どもが何歳になったらがんになるとか、いろいろ言っていたので線量計を買って。北海道に

1カ月行って…

研究参加者は、外遊びや飲料水や食物による内部被爆を気にしており、線量計で放射線を測定することや被災地外への一次的に避難することにより、放射線による子ども達への身体的影響を回避する方法をとっていたことを語っていた。

(ii) からだの成長がこころの成長にリンクする

【からだの成長がこころの成長にリンクする】は、〈震災時2歳から3歳の児の成長に影響しているかもしれない〉、〈震災時2歳から3歳の児は良く食べる。肥満の児がいる〉、〈下の子には（外遊びの）経験させられなかった〉の3つのサブカテゴリーから構成された。以下に、〈震災時2歳から3歳の児の成長に影響しているかもしれない〉の語りを示す。

直接触ることって、とっても大事でそれを食しますよね、私たち、土で育ったもの。そういう遊びを通じて体の成長とリンクしてくるような気もしてるんですけどね。

研究参加者は、震災当時2～3歳児の現在年長になる園児について、経験できなかった遊びから肥満やこころの成長が気にかかる、からだの成長とこころの成長がリンクしているためと語っていた。

(iii) 危険察知力不足

【危険察知力不足】は、〈砂遊びやぐちゃぐちゃ遊びができなかった〉、〈ブランコでも、外で遊んでいればよかった〉、〈五感で感じられないと大きかったのかな?〉、〈ハイハイは芝生でさせない〉の4つサブカテゴリーから構成された。以下に、〈ブランコでも、外で遊んでいればよかった〉の語りを示す。

危険を察知するとか、周りを何て言うんだろう。ブランコでも、外で遊んでいれば、自分たちが遊んでいれば。小さいころでしょうね、幼児期。

研究参加者は、砂遊びやブランコ遊びが出来なかったことで五感が感じられなかった（五感で感じる機会が少なかった）のではと考え、危険察知力が不足しているのではないかと語っていた。

(iv) 幼稚園で培われたたくましさ

【幼稚園で培われたたくましさ】は、〈幼稚園の配慮に気持ちが落ち着く〉、〈遊びすぎるくらい遊んでありがたい〉、〈こどもの体力がつく、どこでも生きられる〉の3つのサブカテゴリーから構成された。以下に、〈こどもの体力がつく、どこでも生きられる〉についての語りを示す。

お兄ちゃん卒園したんですけど、たくましいと思いますよ。どこに行っても生きられるだろうって、それはすごく思いますよ。

比較的、幼稚園は放射能等測りながら、結構外遊びをさせて、変な制限はないというか、先生たちが注意して、注意して、もう安全だっていうのを確認して、外遊びをさせていたでいたしたので、運動不足っていうのはそんなに心配はしなかったです。

研究参加者は、A幼稚園について、放射線を測定しながらの外遊びを行うなど配慮があり、裏山に登ることやウォークラリーなどで子ども達の体力づくりをして、どこでも生きていけるたくまさが培われたことを語っていた。

(v) 適切な情報提供

【適切な情報提供】は、〈先生の知り合いが講演にきてくれた〉、〈先生からきちんとした情報を私たち（保護者）へ発信あり〉の2つのサブカテゴリーから構成された。

以下に、〈先生の知り合いが放射線の講演にきてくれた〉の語りを示す。

親として不安になったときは、先生の知り合いの先生が、講演にいらして下さって、子育てのことを一緒に考えてくださるような講演をしてくださったりして。本当に父兄としては、とても頼もしい幼稚園という、先生方がいらっしゃるの。

研究参加者は、A幼稚園の先生からの適切な情報提供により不安の解消につながり子育てのことを一緒に考えても

らえることで頼もしい幼稚園と語っていた。

(vi) 温度差がある

【温度差がある】は、〈家族間での意見の違いに悩む〉、〈被災地でも被害に差がある〉、〈忘れていないわけではないが騒いでいるのは地元だけ〉の3つのサブカテゴリーから構成された。以下に〈家族間での意見の違いに悩む〉について語りを示す。

全くどこにも避難ができない状態だったので。多分、主人も別に避難をする必要はないっていうような、考えの人だったので。何で避難をしなきゃいけないんだ、みたいな。家を空けなきゃいけないというのが、まず、主人にとっては嫌だったみたいで。そこで悩むんだよね、ママたちは。

研究参加者は、家族間での放射線への考え方の違いに悩み、被災地と被災地外で生活する人の中での放射線の考え方に温度差があることを語っていた。

以上の面接調査の分析結果より、震災5年目の時期の被災地の支援は、平時の健康保持・疾病の予防を行うことから介入を試みることを考えた。

(3) アクションリサーチ：『てあらいのがっこう』の結果

インフルエンザの基本的予防行動としての「咳エチケット」、「マスクの装着の方法」、「手洗い」をについて幼稚園児にわかりやすく実施した。子どもたちと共に教職員の方々も「手洗いの方法」を確認し、自分の手洗いの重要性を見直す機会となった。

また、『てあらいのがっこう』は、手洗いの方法について、教職員ともに看護学生はもとより本プロジェクトチーム員が共に考える機会となった。

親指以外の指の洗い方への提案、子どもへの『てあらい



写真1 園児に看護学生と教員が手洗い指導を行っている様子



写真2 園児が真剣にバイキンを確認する様子

のがっこう』の運営の充実、工夫の示唆を得た。親指以外の指の洗い方への提案とは、大人だと、親指を洗うのを忘れがちであるが、子どもの場合は、親指のほうがかえって洗い残しが少なく、親指以外の洗い残しが目立った。そのために、親指以外の部分を繰り返して実施するように、歌・劇、紙芝居等で強調して提示した。全年齢の園児を対象としたため、年少組みは途中で集中ができなかった。次回からは年齢を年少・年中と年長などに分けて、その年齢に応じて理解できる表現の方法が必要であることがわかった。

5. 考 察

本プロジェクトで明らかになったことは、参与観察では察することができないこと、つまり生活を共にして見えてくることがあるということである。それは、子どもたちの身体的発達や成長は順調に見えるが、内面的な部分である危険察知力の不足やこころの成長を親・幼稚園関係者が気がかりな点として考えていた。さらに一度起きてしまった震災であるため、震災前と全く同じ生活に戻る事はできない現状がある。また、福島県いわき市では、地震・津波に加えて放射線の被害がある。原子力発電所の事故について世間の注目は薄れてきているが、現在も未来も（実際・精神的な面も含む）影響が残っていることを周囲が忘れては

いけないであろう。被災地の人々が最も恐れていることは、忘れられることである。

震災後5年目となり、復興が長期に及んでいることから特別な支援が必要と感じる。しかし、震災5年目の支援は、特別なことではなく平時の健康増進・疾病の予防などの支援が有用であることがわかった。常日頃、看護師が行なっている個々の患者の健康ニーズを捉え看護することである。南（2015）が「社会の変化、人の変化をつかみ、生活全般をみていくことができるのが看護師ではないか⁸⁾」というように、被災地の現状（環境）とそこで生活する人々を見守りながら今後を一緒に考え、寄り添う事が必要であるということであった。

文 献

- 1) 増田まゆみ, 大澤力: 東日本大震災をいかに乗り越えるか—福島県における子どもの実態と保育の研究 I. 東京家政大学, 生活科学研究所研究報告第37集, 1-8 (2014).
- 2) 朝日新聞: 楽しく運動 肥満解消 (2015年5月25日付).
- 3) 原美保, 近藤伸也, 沼田宋純, 目黒公朗: 東日本大震災後における関連学会の活動に関する分析—3.11net 東京 (東日本大震災復興支援研究者ネットワーク) の活動報告 その2—, 生産研究, **63**(6), 37-45 (2011).
- 4) 筒井真優美: 看護におけるアクションリサーチ. 日本私立看護系大学 学術研究および学術研究体制・研究助成に関する事業 平成25年度研究セミナー報告書, 看護研究体制の充実と看護研究における目的別アプローチ. p. 40-47, 日本私立看護系大学協会 (2013年9月3日).
- 5) 小原真理子: 災害看護の基礎知識 5災害サイクル. 小原真理子監修. 命とこころを救う災害看護. p. 16-19, 学習研究社 (2008).
- 6) 佐野紀子, 糟谷知香江: 被災した乳幼児の行動変化—福島いわき市における保育士・幼稚園児教諭への調査から—. 応用障害心理研究, **12**, 27-41 (2013).
- 7) 中村和彦, 菊池信太郎, 眞砂野裕, 長野康平, 岸本あすか, 丹波昭由: 低線量放射線環境下にある幼少児の体力・運動能力向上のための取り組みに関する縦断的研究, SSF スポーツ政策研究, **3**(1), 201-211 (2014).
- 8) 南裕子: 災害看護リーダーを養成 世界を視野に命と生活を守る. 「災害と文明」取材班/編, 災害と文明. 「災害と文明」取材班/編, p. 199-204, 潮出版社 (2015).